

伝道者の書5-8章「言葉数を少なくする知恵」

1A 心の焦り 5

1B 神の前での偽り 1-7

2B 富のもたらす害 8-20

2A 心のあこがれ 6

1B 自分で楽しめない富 1-9

2B 知らされない善 10-12

3A 心のいらだち 7

1B 事の終わりにある知恵 1-9

2B 曲げられている世 10-22

3B 遠く及ばない知恵 23-29

4A 及びもつかない神の心 8

1B 王の裁き 1-8

2B すぐに下されない宣告 9-17

本文

伝道者の書を見ていきます、5章からです。私たちは、ソロモンによる箴言を読み、そこで知恵によって生きることを学びました。晩年になってソロモンはこの伝道者の書を書きましたが、彼はその知恵を尽くして日の下にあることを探りましたが、最も大切なことを忘れていました。主との関係です。私たちは前回、「日の下と御子の中」という題名で、御子の中にある命、これこそが全てであることを見てきました。その命は神との交わりの中にあり、そして永久に続く命です。確かに、ソロモンの言うように、日の下で何か意味あること、意義あることを見出そうとするならば、全てが空しいのです。しかし、主なるイエス・キリストにあつて私たちは、それら無意味に見えることの中にも主がおられ、そして私たちの主にある労苦は無駄にならないことを学びました。それで、ソロモン自身、伝道者の書の結論として、「神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。(12:13)」と言っているのです。

ソロモンが、この書全体の中で伝えたいことの背景には、彼が老年になって死を強く意識しているところにあります。人生を長く生きてきて、その後知恵によって若者がまだ見えていないだろうと思うことを書いています。自分の人生を振り返って、自分で労苦して成し遂げたものは見当たらないと悟る一方で、全て残されたものは主の御手によることが分かりました。自分で成し遂げようとしていたものは残っていない一方で、主がこれをすると言った者は確かに残っています。「時がある」という言葉を彼は好んで用います。「神のなさることは、すべて時にかなって美しい。(3:11)」とある通りです。

そして4章を思い出していただきたいのですが、労苦することについて、その仕事の中に人の妬みがあることをソロモンは見ていました。人が見ればそれは良いことをしているように見えることであっても、その動機は相手よりも優位に立つためであることが分かり、ソロモンは空しさを感じています。そして、そのように仕事に精を出している人々の中には、人との競争の中で行っているのに、友人や共に助け合う者がいないのに、それでも成果を出そうと躍起になっている姿を見ます。そこに失われていることを、彼は指摘し、そしてたとえ、地味に見えても失ってはいけない大切なことを書き始めます。二人でいることのほうが、一人でいるより良いのだということです。一人が倒れても、もう一人が助けてくれるということです。

そして、このように富を求めていく中で、人々の心が公正や正義から目を離している空しさも書いています。愚かな王によって大変な目にあっていて、貧しい出身で知恵のある若者がその代わりに治め、国が救われたにも関わらず、しばらく経つとその支配者に飽きてしまう。こうした、利己的な動き、自分を中心にした動きについても4章の最後に指摘しています。こうやって、仕事をしていく者たち、何か動いていく者たちが犯す過ちを取り上げています。また、人が自己中心で動いて、歪んだ、曲げられた社会になっていることを指摘しています。その続きで5章に入ります。

1A 心の焦り 5

1B 神の前での偽り 1-7

5:1 神の宮へ行くときは、自分の足に気をつけよ。近寄って聞くことは、愚かな者がいけにえをささげるのにまさる。彼らは自分たちが悪を行なっていることを知らないからだ。5:2 神の前では、軽々しく、心あせてことばを出すな。神は天におられ、あなたは地にいるからだ。だから、ことばを少なくせよ。5:3 仕事が多いと夢を見る。ことばが多いと愚かな者の声となる。

とても興味深い戒めです。神の宮に行く、それは神が聖なる方であることを知り、そして畏怖の念をもって心をこの方の前で低め、それで語られることを聞くところでもあります。しかし、そのような場であっても、自分のしたいこと、自分の願っていることを語り出す愚かな行為をしてしまうという過ちです。私たちが、「これをして、あれをして」という心の焦り、仕事の中で身についてしまっているその心の焦りが、主の前に出る時にさえ行なっているということです。

3 節に、「仕事が多いと夢を見る。」とあります。仕事をしすぎると、夢にも出てきますね。そういった物理的な夢のことを話しているだけでなく、ここでは地に足を踏んでいない、浮ついた状態になっていて、「これをするのだ、あれをするのだ」と夢想している状態も表しています。自分のありのままの姿を主の前に持ってくるのではなく、偽って出てくる過ちです。そういった心の状態の時は、言葉が多くなります。実際の自分はそうではないので、言葉によって補おうとしているからです。

5:4 神に誓願を立てるときには、それを果たすのを遅らせてはならない。神は愚かな者を喜ばないからだ。誓ったことは果たせ。5:5 誓って果たさないよりは、誓わないほうがよい。5:6 あなたの

口が、あなたに罪を犯させないようにせよ。使者の前で「あれは過失だ。」と言ってはならない。神が、あなたの言うことを聞いて怒り、あなたの手のわざを滅ぼしてもよいだろうか。5:7 夢が多くなると、むなしいことばも多くなる。ただ、神を恐れよ。

心が焦っている時に犯す罪は、自分のそのしたい願いを、神の名を利用してまで行なうことです。「私はこれこれのことをします。」と主の働きをします、と言っておきながら、都合が悪くなるとそれをしなくなる、という過ちです。その過ちを主は深刻に受けとめておられて、旧約聖書ではそれを罪とみなし(申命記 23:21)、新約聖書ではイエス様も、「『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』としなさい。」と命じられています。

何がいけないのか？イエス様の命令にあるように、主人に命じられた僕という立場に自分を置いておいていないことです。主が語られたことを私は行います、という僕であるならば、主が語られている限り、自分はそこにいるのです。だから、そういう人は忠実です。それは、いつまでも同じことを繰り返して行なうという意味ではありません。主は時に、「やめなさい」と命じられます。そうしたら、やめるのです。けれども、これを行なう、あれを行なうとして、結局「これをやります」と言っておきながやめるのは、それは罪なのです。

2B 富のもたらす害 8-20

5:8 ある州で、貧しい者がしいたげられ、権利と正義がかすめられるのを見ても、そのことに驚いてはならない。その上役には、それを見張るもうひとりの上役があり、彼らよりもっと高い者たちもいる。5:9 何にもまして、国の利益は農地を耕させる王である。

貧しい者が虐げられているという現状を見て、それで驚いて、心を騒がせる必要はないと戒めています。なぜならば、その虐げられている者の上にはさらに権力者がいて、その者を裁くと言っています。ここで大事なものは、その究極の上役、もっと高い者たちとは神ご自身です。全ての上の権威は神から来るものであり、もし上に立つ者が虐げているなら、その権威を与えられた神ご自身が裁かれます。私たちは、正義感に駆られて何か行動に移します。根回しをしたり、上に立つ人に嘆願したり、心を騒がせながらこれらのことをするのですが、その前に、全ての者の上に立つ神ご自身がおられることを知る、ここから始めないといけません。

そして、主が願われているのは、忠実さです。9 節に、「国の利益は農地を耕させる王である。」とありますが、正しい王は農地を耕させるという、国の基盤を良く知っていて、それを根気よく、忍耐を尽くして行なうようにさせる訳です。他に富が集まるものは数多くある中で、最後に残るのは、こうした地道な働きなのだということを知っている人です。ですから、霊的にも同じです。主が語られているその御言葉によって養われること。そして、その主の命令に応答して、主に仕えること。この忠実さが、確実に聖霊の実を結ばせます。

5:10 金銭を愛する者は金銭に満足しない。富を愛する者は収益に満足しない。これもまた、むなしい。5:11 財産がふえると、寄食者もふえる。持ち主にとって何の益になろう。彼はそれを目で見るだけだ。5:12 働く者は、少し食べても多く食べても、こちよく眠る。富む者は、満腹しても、安眠をとどめられる。

仕事をする時に、その目的を見失い、4章で見たように人を蹴落したり、孤独になっているのに働いていたりします。その成果ばかりに気が留められるからです。そこで、ソロモンは「富」に注目します。富そのものは悪いものでは決してないことを、ソロモンは箴言でも教えていました。仕事をする時に、その労働の対価を主に拠って与えられる、その喜びを味わう、こうしたシンプルな生活をソロモンは伝道者の書において教えています。

ところが、富というのは幸せよりも、むしろ様々な災いをもたらしかねないことを彼は教えています。一つは、富を愛することです。賜物であるはずの富自体を求めていくと災いが起こります。その一つは「心に満足を与えない」ことです。富や持ち物が、いつかなくなるのではないかという不安があります。富には必ず寄食者が寄り付きます。自分のところに人は集まるのですが、それは自分の持っている物をただ貪りたい、利用したいと思っているから寄りついて、そして利用して去っていくのです。ですから、寝ることさえできなくなってしまいます。

私たちはイエス様の言われた戒めをいつも思い出すべきです。「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。(マタイ 6:24)」賜物は賜物です。主人が与え、また取ることもあります。大事なものは主人であり、与えられるものではありません。イエス様は食べ物について何と言われたでしょうか、「わたしの遣わした方のみこころを行ない、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。(ヨハネ 4:34)」主の御心を行なっているということ、そこに私たちの心が満足します。

5:13 私は日の下に、痛ましいことがあるのを見た。所有者に守られている富が、その人に害を加えることだ。5:14 その富は不幸な出来事で失われ、子どもが生まれても、自分の手もとには何もない。5:15 母の胎から出て来たときのように、また裸でもとの所に帰る。彼は、自分の労苦によって得たものを、何一つ手に携えて行くことができない。5:16 これも痛ましいことだ。出て来たときと全く同じようにして去って行く。風のために労苦して何の益があるだろう。5:17 しかも、人は一生、やみの中で食事をする。多くの苦痛、病氣、そして怒り。

そして富のもたらす災いのもう一つは、不幸です。何も持っていなければ起こるはずのないことが、富を持っているから起こります。それで、子供がいるのにその富を用いることができない状態になる、ということもあります。そして、富が死ぬ時に持っていくことができない現実も悟ります。そして、食べても病のために苦痛の中で食べなければいけない、また誰かによってもたされた状況であれば、その怒りの中で食べなければいけない。こういった悲劇が訪れます。

5:18 見よ。私がよいと見たこと、好ましいことは、神がその人に許されるいのちの日数の間、日の下で骨折るすべての労苦のうちに、しあわせを見つけて、食べたり飲んだりすることだ。これが人の受ける分なのだ。5:19 実に神はすべての人間に富と財宝を与え、これを楽しむことを許し、自分の受ける分を受け、自分の労苦を喜ぶようにされた。これこそが神の賜物である。5:20 こういう人は、自分の生涯のことをくよくよ思わない。神が彼の心を喜びで満たされるからだ。

すばらしい信仰生活の姿勢です。今、話しましたように、主は与え、主は取られるのです。だから、与えられたものを主に感謝して、日々を過ごす。その日、その日、与えられたことに感謝する。今日、主が戻って来られるかもしれない。そして、悲しむようなことがあっても、実は主がこんな恵みをくださっている。もう既に主は新しいことを、行なわれているかもしれません(ピリピ 4:4-7)。

2A 心のあこがれ 6

1B 自分で楽しめない富 1-9

6:1 私は日の下で、もう一つの悪があるのを見た。それは人の上に重くのしかかっている。6:2 神が富と財宝と誉れとを与え、彼の望むもので何一つ欠けたものがない人がいる。しかし、神は、この人がそれを楽しむことを許さず、外国人がそれを楽しむようにされる。これはむなしいことで、それは悪い病だ。

自分の貯めた富について、もう一つの悪だと言っていますが、先ほどの不慮の事故によって起きる不幸についてでしたが、こちらは人間によってもたらされるものです。世の中ではしばしば起こることですが、創業者やその家族が始めたその事業が、他の全く異なる人々に買収されてしまうということがあります。このような状況のことを話しているのでしょうか。私も、あるクリスチャンの人がそのような目に遭ったことを聞きました。けれどもその人は、主に仕えることに満足し、主に与えられている財産だけで満足しておられました。もし、主ご自身がいなければ、ソロモンのように空しいこと、悪い病でありましょう。

6:3 もし人が百人の子どもを持ち、多くの年月を生き、彼の年が多くなっても、彼が幸いで満たされることなく、墓にも葬られなかったなら、私は言う、死産の子のほうが彼よりはましだと。6:4 その子はむなしく生まれて来て、やみの中に去り、その名はやみの中に消される。6:5 太陽も見ず、何も知らずに。しかし、この子のほうが彼よりは安らかである。6:6 彼が千年の倍も生きても、..しあわせな目に会わなければ、..両者とも同じ所に行くのではないか。

子沢山に恵まれる、また長寿を全うするというのは、人の幸せを構成する重要な要素であり、モーセは律法を守り行くとそのようになると、教えていました。しかし、今のような、富が外国人の手に渡ってしまうという不幸に遭うと、これらの祝福が与えられていても、心は回復しません。生まれでこなかったほうがまさっている、という言葉は、かつてヨブも言っていました。

6:7 人の労苦はみな、自分の口のためである。しかし、その食欲は決して満たされない。6:8 知恵ある者は、愚かな者より何がまさっている。人々の前での生き方を知っている貧しい人も、何がまさっている。6:9 目が見るところは、心があこがれることにまさる。これもまた、むなしく、風を追うようなものだ。

ここでソロモンが取り扱っているのは、9 節にある「心の憧れ」です。人々は、こうなったらいいなと思って、そのために努力して働きます。けれども、実際の自分が得ているもの、自分が神から与えられている分、それをありのままに見ないで、「自分をもっと向上できている」と自分に思い込ませて、それで労苦しています。けれども、その欲求は決して満たされません。そして、自分が向上するために知恵を使って働きます。まだ得ていない状態、貧しい状態であっても、それでも人の前での振る舞いもしっかりやります。

けれども、それは空しいと言っています。なぜなら、主の前には決められたことがあるからです。この方の御心に沿って行き、この方に従うこと以外に、意味あることはないのです。それでも自分のために動くのなら、その欲求はいつまでも満たされません。

2B 知らされない善 10-12

そこでソロモンは、そのような目に見える現実を直視して、そこに主を認めて満足することを教えていきます。

6:10 今あるものは、何であるか、すでにその名がつけられ、また彼がどんな人であるかも知られている。彼は彼よりも力のある者と争うことはできない。6:11 多く語れば、それだけむなしさを増す。それは、人にとって何の益になるだろう。6:12 だれが知ろうか。影のように過ごすむなしいつかのまの人生で、何が人のために善であるかを。だれが人に告げることができようか。彼の後に、日の下で何が起こるかを。

5 章では心が焦っていること、そして 6 章では心に憧れていること、仕事の成果や富について、私たちに付きまとうこうした心の状態に対して、主は力ある方として私たちの間に立ちほだかります。私たちの心は争います。どうして、こうなるのですか、という言葉を出します。そして、言葉を出せば出すほど、自分が神の定められた運命に不服であることを示しています。自分にとっては善だと思っていることも、神の前ではそうではないかもしれません。主が全てのことをしておられるのですから、私たちは、「あなたが願われていることをしてください。」と告白するのみです。

3A 心のいらだち 7

1B 事の終わりにある知恵 1-9

そこでソロモンは、分かり易い知恵を教えます。私たちが肉による意欲がある時と、そうではなく神によって定められた道を知って、それを認める時と、後者がまさっていることを教えています。

7:1 良い名声は良い香油にまさり、死の日は生まれる日にまさる。7:2 祝宴の家に行くよりは、喪中の家に行くほうがよい。そこには、すべての人の終わりがあり、生きている者がそれを心に留めるようになるからだ。7:3 悲しみは笑いにまさる。顔の曇りによって心は良くなる。7:4 知恵ある者の心は喪中の家に向き、愚かな者の心は楽しみの家に向く。7:5 知恵ある者の叱責を聞くのは、愚かな者の歌を聞くのにまさる。7:6 愚かな者の笑いは、なべの下のいばらがはじける音に似ている。これもまた、むなしい。

なぜ喪中の家のほうが、祝宴の家よりも優っているのか？なぜなら、人の死は、そこにまで至る神の軌跡の全てを眺めることができるからです。自分がやる気を出して行っていたことが頓挫して、それでいらだって、それであたふたして生きていたとしても、その死んだ時には、人のわざではなく、その人を導いてきた神の御手を思うことができるからです。死を目にする時、そこには人がどんな努力をしても何もできないという、人間と神との関係をはっきりと見えるのです。生きているという時は、本当は何もできないはずなのに、できると思い込むことがあります。しかし、そこには真実な、生きている力は出ていません。作り出した力であり、そこから出てくる笑いも作り笑いです。

しかし、私たちはキリストにあって、肉体の死の前に死ぬことができます。自分で生きようとする力が死ぬ時に、私たちはキリストの死と復活にあやかることができます。自分に死んだ人は、そこから神の命と恵みが溢れ出て、作った喜びではなく、真実な、溢れてくる喜びを味わいます。「ピリピ 3:10-11 私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。」

7:7 しいたげは知恵ある者を愚かにし、まいないは心を滅ぼす。7:8 事の終わりは、その初めにまさり、忍耐は、うぬぼれにまさる。7:9 軽々しく心をいらだててはならない。いらだちは愚かな者の胸にとどまるから。

知恵のある人々にも、限界があります。虐げが多いとその心が折れてしまいます。また、賂、人に必要以上に良くしてもらうと、本当は不当なことをしている人なのに、その人の友となってしまいます。しかし、その時に思い出すと良いのは、事の始まりではなく、事の終わりを思うことです。始まりを思い出すから、今がいかに悪くなってしまうのかと嘆くのです。けれども、大事なのは自分が最後にどうなっているのか？ということです。事の終わりを思うことです。それでくじけない、心が折れないようにすることです。

そして、生きている内に起こる様々な不正や虐げや偽り、こうしたものを見る時にいちいち憤っているのは、それは知恵のないことです。日の下においては、こうしたものは起こるのだという心構えが必要です。これは決して怒ってはならない、ということではありません。怒る時は怒ります。イエス様は、パリサイ人や律法学者との言い合いで、いつも冷静に語っておりました。けれども、宮清めの時は、神の聖なる怒りを表しました。

2B 曲げられている世 10-22

7:10 「どうして、昔のほうが今より良かったのか。」と言ってはならない。このような問いは、知恵によるのではない。

今、話しましたように、事の始まりを思ってしまうと、今を昔と比べてしまうのです。そしていらだつことが多くなってしまいます。しかし主は、「終わりを見なさい」と命じられます。思えば、聖書も、昔と比べれば、アダムが罪を犯す前のエデンの園と比べれば、その後のことはすべて悪くなっているのです。しかし終わりを見ます。イエス様が戻って来られる日を見ます。そして終わりに神の建てられた都を見ます。

7:11 資産を伴う知恵は良い。日を見る人に益となる。7:12 知恵の陰にいるのは、金銭の陰にいるようだ。知識の益は、知恵がその持ち主を生かすことにある。

比べるのではなく、今、主の下さったものがあります。資産が今、あります。それに満足します。自分に与えられたものがありますね、物質だけでなく、精神面、霊的な面でいろいろなものが与えられています。

7:13 神のみわざに目を留めよ。神が曲げたものをだれがまっすぐにできようか。7:14 順境の日には喜び、逆境の日には反省せよ。これもあれも神のなさること。それは後の事を人にわからせないためである。

私たちの苛立ちは、真っ直ぐにしようとするところから来ます。しかし、そのような社会活動家に見られるような正義感は、神の前では無益です。結局、神からのものでなければまっすぐにすることはできないのです。むしろ、そうした曲がったことについて、自分に対して主が何かを語られているのです。ですから、逆境の時には反省します。順境の時は、素直に喜びます。私たちは、神の定めた時から飛び出して事を悟ることはできないからだ、とソロモンは言っています。

7:15 私はこのむなしい人生において、すべての事を見てきた。正しい人が正しいのに滅び、悪者が悪いのに長生きすることがある。7:16 あなたは正しすぎではならない。知恵がありすぎではならない。なぜあなたは自分を滅ぼそうとするのか。7:17 悪すぎてもいけない。愚かすぎてもいけない。自分の時が来ないのに、なぜ死のうとするのか。7:18 一つをつかみ、もう一つを手放さないがよい。神を恐れる者は、この両方を会得している。

ソロモンは、主は正しくないということを書いていません。神は正しい方ですが、私たちが正しいと完全に悟ることができるようには、その正しさをお見せになっていないということです。ですから、私たちに新たな知恵を与えています。それは、「執着しない」ということです。正しすぎではならない、という言葉に注目します。正しいことだと思っても、それが果たして神にとって正しいことなのか分

かりません。ですから、正しさを求めますが、そこに「自分が知っている正しさは一部だけだ」という自制が必要です。そして愚か過ぎてはいけない、ともあります。これは、「良い意味でいい加減になる。」ことです。自分のしていることは、たかが知れています。大事なものは神ご自身です。けれども、本当にいい加減になってはいけません、そうすれば自分を滅ぼします。自分の体に悪いことを行なうでしょう、また自分の魂に悪いことを行なうのです。普通にしていれば生きられる日々を短くしてしまいます。

7:19 知恵は町の十人の権力者よりも知恵者をかづける。7:20 この地上には、善を行ない、罪を犯さない正しい人はひとりもないから。

知恵を持っている人は、「人は罪人だ」ということを根底から分かっている人です。ソロモンが神殿を建て、それを奉献する時に祈りましたが、「罪を犯さない人間はひとりもないのですから。(1列王 8:46)」と祈っています。この知恵が与えられる時に、私たちは人のしている悪に簡単にいらだつことはないですし、また自分が正しいと思っていることも、完全に正しいのか分からない、神のみが知っておられるという余裕が与えられます。

7:21 人の語ることばにいちいち心を留めてはならない。あなたのしもべがあなたをのろうのを聞かないためだ。7:22 あなた自身も他人を何度ものろったことを知っているからだ。

誰でも罪を犯すということの一つに、呪いがあります。だれかのことを悪く言って、捨て台詞を言うことです。主人にとって、上に立つ者にとって、その下にいる者が自分を呪うことは、いつものこととあります。全ての人が罪人なのです。必ず起こることとあります。ですから、他の人に何と云われているのかを気にして、神経をすり減らさないようにしなさい、と勧めています。よく考えてみれば、自分が誰かの下で働いている時も、何度も呪っていたのです。

3B 遠く及ばない知恵 23-29

7:23 私は、これらのいっさいを知恵によって試み、そして言った。「私は知恵ある者になりたい。」と。しかし、それは私の遠く及ばないことだった。7:24 今あることは、遠くて非常に深い。だれがそれを見きわめることができよう。

正義感をもって動いても、本当に道理をわきまえているのか、というところではありません。なぜそんな悪があるのかと、その理由や背景を調べ、その人は知恵を得ます。けれども、ソロモンがそれをやりつくしました。どうしてそんなことになっているのか、突き詰めればそれだけ、自分の理解に及びもつかないことを悟ったのです。

7:25 私は心を転じて、知恵と道理を学び、探り出し、捜し求めた。愚かな者の悪行と狂った者の愚かさを学びとろうとした。7:26 私は女が死よりも苦々しいことに気がついた。女はわなであり、

その心は網、その手はかせである。神に喜ばれる者は女からのがれるが、罪を犯す者は女に捕えられる。7:27 見よ。「私は道理を見いだそうとして、一つ一つに当たり、見いだしたことは次のとおりである。」と伝道者は言う。7:28 私はなおも捜し求めているが、見いださない。私は千人のうちに、ひとりの男を見いだしたが、そのすべてのうちに、ひとりの女も見いださなかった。

しばしば天才の人が、「なんでこんな愚かなことをするのだろうか。」と驚く時がありますが、ソロモンがそうでした。ソロモンが 2 章で認めたように、「狂気」を知ろうとしました(17 節)。そしてその愚かさの中に、数多くの女がいたのです。それがいかに苦々しいものであったか、それをソロモンはここで言い表しています。主を恐れる女は、ほめたたえられるべき、真珠よりも貴い存在であることを箴言 31 章で学びましたが、そうでないとどれだけそのもつれた関係が自分の枷になるのかを言い表しています。

7:29 私が見いだした次の事だけに目を留めよ。神は人を正しい者に造られたが、人は多くの理屈を捜し求めたのだ。

ここの「正しい」というのは、ヘブル語では「まっすぐ」と訳せる言葉です。人は神によって造られ、神に従い、神に頼むことが全てであるように造られました。ですから、シンプル、単純なのです。ところが、人は不思議にも「そんなに単純ではない、複雑だ」として、いろいろな理屈を探すのです。それがまさに、ソロモンの人生でした。最後には、主を恐れることが全てだと言っていますが、だったら主を恐れるだけで生きればよかったものの、自分で観察して知恵を探ろうとし、また愚かさも体験していったいどのようなものかを試したのです。こんな回り道をする必要はなかったのです。私たちも、イエス様に従って生きるということをするまでに、自分でいろいろと試して、回り道をしていることはないでしょうか？

4A 及びもつかない神の心 8

1B 王の裁き 1-8

8:1 だれが知恵ある者にふさわしいだろう。だれが事物の意義を知りえよう。人の知恵は、その人の顔を輝かし、その顔の固さを和らげる。8:2 私は言う。王の命令を守れ。神の誓約があるから
8:3 王の前からあわてて退出するな。悪事に荷担するな。王は自分の望むままを何でもするから。
8:4 王のことばには権威がある。だれが彼に、「あなたは何をしますか。」と言えようか。8:5 命令を守る者はわざわざいを知らない。知恵ある者の心は時とさばきを知っている。

知恵によって物事を探り出そうとしても、遠く及ばないと嘆いたソロモンですが、ここでは、知恵によって人の顔に輝きを与えられ、顔の固さが和らぐと言っています。それは、王の命令を守ることには、知恵が十分にあるからです。「神の誓約があるから」と言っていますが、王には絶対的主権があり、それが神から与えられていたからです。箴言で彼は、「箴言 24:21-22 わが子よ。主と王とを恐れよ。そむく者たちと交わってはならない。たちまち彼らに災難が起こるからだ。このふ

たりから来る滅びをだれが知りえようか。」と言いました。物事を探究する知恵ではなく、王の主権と命令に従うところにある知恵です。

私たちは、子供との礼拝を導く教師向けに教えている教材がありますが、それを習った人たちがご存知だと思います。神の知識というのは、学習して納得するような知識、大人が会得するような知識ではなく、言われることに従う知識であると教えています。この小さな子のようにならなければ、神の国に入れないということをイエス様は言われましたが、神の言葉は理解して把握するものではなく、従うものなのです。もちろん、機械的にではなく、むしろ子が親を信頼するのと同じように、人格的に信頼して、そしてその命令に従うのですが、「主が言われているから」という理由でそれに従うという、その絶大な信頼と従順に知恵があります。

そして王の命令を守る者は、災いから免れます。「知恵ある者の心は時とさばきを知っている。」と言っていますが、私たちは「時」について学びました。神が永遠の方であり、時を定めておられます。それだけでなく、裁きも定まっていること、全てのことが神の前で裁かれることを知ることは、知恵があります。ソロモンは伝道者の書の最後で、「12:14 神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。」と言いました。

8:6 すべての営みには時とさばきがある。人に降りかかるわざわいが多いからだ。8:7 何が起こるかを知っている者はいない。いつ起こるかをだれも告げることにはできない。8:8 風を支配し、風を止めることのできる者はいない。死の日も支配することにはできない。この戦いから放免される者はいない。悪は悪の所有者を救いえない。

悪を行なえば災いが必ず来る、というのは神の定めであるということです。

2B すぐに下されない宣告 9-17

8:9 私はこのすべてを見て、日の下で行なわれるいっさいのわざ、人が人を支配して、わざわいを与える時について、私の心を用いた。8:10 そこで、私は見た。悪者どもが葬られて、行くのを。しかし、正しい行ないの者が、聖なる方の所を去り、そして、町で忘れられるのを。これもまた、むなしい。8:11 悪い行ないに対する宣告がすぐ下されないので、人の子らの心は悪を行なう思いで満ちている。

悪を行なえば必ず、その報いを受けます。しかし、その宣告がすぐには下されないために起こっていることについて、ソロモンは空しさを覚えています。10 節の訳ですが、口語訳ではこうなっています。「またわたしは悪人の葬られるのを見た。彼らはずっと聖所に入出し、それを行ったその町でほめられた。これもまた空である。」つまり、悪者なのに町でほめられ、悪者なのに聖所に入出し、そして葬られているということです。このようにして、悪が罰せられていません。

主は、なぜそのようなことをされるのでしょうか？それは、イエス様が「敵を愛しなさい」と弟子たちに教えられた、その次に出てきます。「マタイ 5:45 それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。」悪い人にも太陽を上らせる、雨を降らせる、こうした恵みを注がれているのは神ご自身です。主は、悪者に忍耐されているのです。神はご自身をモーセに現わされた時に、「主は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富み（出エジプト 34:6）」と言われました。怒るのに遅い神です。したがって、悔い改めるのを忍耐して、待つておられます。「2ペテロ 3:9 主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」

しかし、多くの悪者はそう考えません。裁きが遅いことを、神には裁くことはできないのだと考えるのです。主は見ておられない、見ることはできないのだと考えるのです。それで、悪を行ない続けています。

8:12 罪人が、百度悪事を犯しても、長生きしている。しかし私は、神を恐れる者も、神を敬って、しあわせであることを知っている。8:13 悪者にはしあわせがない。その生涯を影のように長くすることはできない。彼らは神を敬わないからだ。8:14 しかし、むなしいことが地上で行なわれている。悪者の行ないに対する報いを正しい人がその身に受け、正しい人の行ないに対する報いを悪者がその身に受けることがある。これもまた、むなしい、と私は言いたい。

ソロモンは、悪者は短命であることを知っています。正しい者が長く生きることを知っています。神がそのように約束してくださったからです。ところが、むしろ正しい者が短命で、悪者が長寿と言う時もあるのです。それで、悪者の報いを正しい人が受け、正しい人の報いを悪者が受けることがあるのだ、と言っています。

しかし、このソロモンの神学は正しいのでしょうか？多くの人がこの疑問を投げかけますね。正しい人にどうして悪いことが起こるのか？と。けれども、ソロモンは前に、「この地上には、善を行ない、罪を犯さない正しい人はひとりもないから。(7:20)」と言いました。正しい人という人は、一人もいないです。けれども、なぜその特定の罪を犯していないのに、犯した者のような災いが襲うのか？と思うかもしれません。そのとおり日の下に起こることは、不公平です。なぜなら、アダムが罪を犯して、この地が呪われたものとなったからです。全人類に罪が入って、死ぬことが定められたのです。この時点で不公平なのです、人類の頭が罪を犯したので、その下にいる者も罪人として生まれました。そして、必ずしも特定の罪を犯していないのに、土地の呪いによってもたらされる災いを、その人も受けるのです。

そして、私は不公平であることを神に感謝しています。なぜなら、この地上に公正しかなければ

私は滅び、死後に神の裁きを受けなければいけない存在ですから。神の憐れみがあって、今、こうやって生きることができます。神ご自身が、正しい者に悪者の報い、悪者に正しい者の報いという不公平を行われました。そうです、ご自分の正しい方、キリストの刑死です。正しい方の十字架刑こそ、不公平なことはありません。しかし、罪のない方が罪とされたので、キリストにあって罪人が義と認められたのです。

8:15 私は快樂を賛美する。日の下では、食べて、飲んで、楽しむよりほかに、人にとって良いことはない。これは、日の下で、神が人に与える一生の間に、その労苦に添えてくださるものだ。8:16 私は一心に知恵を知り、昼も夜も眠らずに、地上で行なわれる人の仕事を見ようとしたとき、8:17 すべては神のみわざであることがわかった。人は日の下で行なわれるみわざを見きわめることはできない。人は労苦して捜し求めても、見いだすことはない。知恵ある者が知っていると思っても、見きわめることはできない。

ソロモンは、日々与えられる食べ物、一日の労働の後で食べる物、これに感謝するところに神を知ることができています。そして、大事なものは「すべては神のみわざであることがわかった。」というところ。人が何か業を行っても、主の御心だけが成っています。

ですから、私たちは自分に悟ることができないことが起こっても、「これも、主が行っておられることなのだ。」とみなして、神をあがめるのです。それが、どうしてそうなるのか？ということはありません。しかし、そのような不条理なことを、神はキリストにあってご自分の身に受けてくださいました。ゆえに、不条理なことがある時に、ここにはキリストがおられるのだ。イエス様がここにおられるのだ。イエス様こそが、何も罪を犯していないのに、あれだけの告発と罵りと、酷い仕打ちを受けられたのだ。そして不条理、不条理と言うが、まさに自分こそが不条理ではないか！と気づきます。罪人であるのに、一方的に赦されて、洗い清められて、神の恵みによって立っているのです。

そして最後に、「昼も夜も眠らずに、地上で行なわれる人の仕事を見ようとした」というところに注目したいと思います。これが問題の原因でした。あくせく働く・もちろん私たちは勤勉に働くべきです。けれども、ソロモンが助言しているように、一日の労苦について神に感謝し、その労働の実である食物に感謝すること以上に働く、また、神に命じられていること以上に何かを成し遂げようとする時に、私たちの言葉は多くなり、はかない夢が多くなり、心はいらだち、また絶望します。全てのことは主が成しておられるのだということを見ていきましょう。そして私たちのすることは神の命令を守ること、そしてさばきは神がしてくださいます。